

論文の内容の要旨

論文題目 労働証券論の歴史的位相：貨幣と市場をめぐるヴィジョン

氏名 結城剛志

本稿では、貨幣と市場のヴィジョンをめぐる労働証券論の歴史的位相を以下のように再構成している。まず、第1章において、プルドン-マルクス論争の焦点が、市場は真に安定的なのか、それとも原理的に無規律な性格を持っているのか、という市場ヴィジョンの相剋問題であることを明らかにした。プルドンが無償信用を与える交換・人民銀行の設立を梃子として安定的で理想的な市場像の実現を追求していたことにたいして、マルクスは現実の市場への分析的接近を通じて無政府的な生産活動が助長する市場の無規律性を指摘し、両者が対極的なヴィジョンを有していることが解き明かされた。市場が、原理的には、あるいは理想的にはどのような姿をしているのかという論点をめぐってたたかわされた論争の帰結は、当為的なプルドンと分析的なマルクスとの思考法の相違からもたらされていたのである。そのような対極的な市場ヴィジョンの基底には、貨幣が市場を攪乱するという実体に近い貨幣把握によるのか、それとも貨幣は本来交換へ干渉することのない中立的な媒体にすぎないのか、という貨幣ヴィジョンの相剋がある。それは、貨幣がそれ自身商品から派生する実体的なものなのか、あるいは貨幣それ自体は実体を持たず生産者間の関係性を代表する理念や象徴にすぎないのか、という問題でもあるだろう。この論争を通じて、市場を理解するためにはまずなによりも貨幣を解き明かさなければならないのだという原問題も明確に摘出されたのである。マルクスの価値形態論を白眉として、貨幣問題に着目しつつも貨幣の理念像からの乖離幅を秤として性急に貨幣改革論を打ち出したプルドンの市場像には原理上の理論的困難が含まれていることがはっきりとし、プルドンのヴィジョンの望ましさが殺がれてしまったかのようなのである。だが、市場の廃絶を目指したと考えられるソ連型社会主義の崩壊という現実的なインパクトを受けて、否定的な市場の原理像を提示したマルクスのヴィジョンから離れ、それとは異なるオルタナティ

ブが求められ始めているということは自然な成り行きなのかもしれない。ブルードンの市場像が現代的にある範囲の人々に受け入れられ、自由で平等な市場世界の理想像が再び掲げられることで、それが社会のあり方を構想するきっかけを与えているのだといえよう。このような理論と思想の捻れともいえる状況を受け止めるならば、分断された市場像の意味を問いつける必要性が増すはずであり、また翻って実在論的なマルクスの市場像と計画経済型の社会主義に帰着するかのような展望論との関連性も改めて問い直されなければならない。ブルードン―マルクス論争の帰結として、二分された実在論的市場ヴィジョンと理念論的市場ヴィジョンが立ち現れるのである。また、ブルードンの継承を自認するゲゼルによって理念論的市場ヴィジョンが 20 世紀初頭のドイツの地でも再現されていることについて第 7 章で関説した。

マルクスはブルードンにたいし市場内因的な動力によりそれ自身が攪乱される点を強調していたのであるが、他面では生産の無政府性が社会的な需給調整の困難をもたらす市場の不安定性をもたらすと論及していた。後者の説明の論理的な帰結から、小ブルジョワ的な貨幣改革論である労働貨幣論が非現実的な提案であるというばかりではなく、背理的には非貨幣的な労働貨幣であればそれは実現可能だということがいえるのではないかと、ということをも第 2 章で指摘した。

だが、オウエンはブルードンと同様の理念論的市場像を有しているにもかかわらず、生産の無政府性という観点からは、オウエンとブルードンの想定する生産体制の異質性をもって直ちにオウエンが肯定されてしまうのであり、そこではもはや貨幣と市場のヴィジョンをめぐる争われることがなくなってしまう。マルクスは労働貨幣論の貨幣論的な偏向を論難するあまり、将来社会の素描においてはブルードン批判で発揮された実在論的な貨幣把握が十分に活かされていないように見え、生産の無政府性が克服されれば無貨幣経済が可能になるとするマルクスの将来展望とオウエンのそれとの同値性がかえってマルクスへの疑義を強めてしまうのである。マルクスは実在論的な貨幣・市場ヴィジョンを発見していたにもかかわらず、将来展望論ではその知見が十分に反映されなければならないような論理的関連性が欠落しているのである。

オウエンは、マルクスのように労働時間概念に内包される私的労働と社会的労働の対立といった労働の私的社會性や商品の二要因の抽出といった精緻な分析を行っているわけではない。オウエンは市場を総供給と総需要の対抗関係で把握しているところがあり、金貨幣の干渉により総量不一致をもたらされることから、購買力不足の過少消費型恐慌に発展するといわれたのである。総需給の不一致をもたらす要因に関する両者の分析は根本的なレベルでは異なっているのであるが、オウエンは購買力の量的問題に限らず、それと対応する生産の部門間編制の問題もコミュニティ建設計画案として提示していた。貨幣改革を通じて総需給を量的に一致させることの限界性を察し、部門間編制の問題を捉えていたからこそ、貨幣問題を克服するためには貨幣の改造のみでは不十分であり、貨幣の揚棄とそれに伴う市場の廃棄がなされなければならないという結論の一致がもたらされるのである。ただし、繰り返しになるが、結論の一致は同一の論理的過程から導出されたものではなく、特にオウエンが市場の質的問題を看過していることは明らかであり、この点を析出したマルクスの場合も展望を論じるにあたってその成果をどのように活かそうとしているのか十分に読み取れないところでもある。オウエンは金素材に阻害されて貨幣がその理想

的な姿から逸脱してしまっているのだと考え、貨幣を金の重荷から解放しつつも、労働という錨をつけることで無価値の紙券による労働証券システムの安定化を目指している。そのような紙券管理の政策的手法は第6章で考究されたグレイの労働証券論にも採用されているところである。

第5章と関わる論点にもなるが、非貨幣的な労働貨幣という語義矛盾的な貨幣のあり方が理論的にも実践的にも可能なのであれば、そのような視座から現代の地域通貨諸運動を捉え返してみると、タイムダラーという地域通貨をその射程に捉えうるのではないだろうか。マルクスも労働貨幣論者もともに市場的＝生産的領域で運動する貨幣を考察していたのであるが、タイムダラーは非市場的な領域内で限定的に流通しているのである。地域通貨との関連で、労働貨幣論をめぐる所説を検討することで、これまで市場や生産の内部のみで考えていた問題を、社会の維持と再生産のための領域とみなしてしまうのでは狭すぎるということが垣間見えてきたのではないだろうか。拡張された再生産領域での交換においては等価性を追求するよりはむしろ不等価性を受容するような関係の構築が肝要なのであり、また市場外部の領域は再生産にとって付随的なものなのではないということも併せて指摘した。

とはいえ、オウエンによっても、地域通貨によっても、それらに提示される市場像は極めて理念論的である。それらが依拠する認識的基盤の頑健性には疑わしいところがあるし、実在論的認識に基づかない制度設計の脆さや危うさを感じさせるところでもある。労働証券と地域通貨の理論・思想・実践の三面にわたる総括的把握から地域通貨のさらなる改進黨を望むのであれば、実在論的市場の知悉から、いまそこにある世界の様態から出発しなければならないことは自明であろう。

労働証券論は理念追従的に社会主義論を構築し体系的学説として脱皮しようとしていたのであるが、より現実的な認識を基礎とすることでそれを地域通貨論として脱体系化していかなければならない。そのための基礎的作業として、第3章から第4章にかけてオウエン型の労働証券論にたいして提示されたウォレンとペアによる批判的学説を考究した。

オウエンはコミュニティ・ベースの平等主義的な労働証券論を展開していたのであるが、これにたいしてウォレンの労働証券論はニュー・ハーモニーでの実践的な反省を踏まえて、個人の責任と自発性を引き出すような工夫がなされていた。それは例えば、異種の労働評価に格差を設けた点や証券の発行主体を個人に設定した点などである。さらに、コミュニティ内部での競争が促されている。このようにオウエンの平等主義的な労働証券論の欠点を克服しようとしたウォレンの労働証券論であったが、微視的観点からのアプローチへとシフトしてしまったために、オウエンが目指していた社会的な観点での公平性や協同性の確保といった論点が抜け落ちてしまったところがある。また労働の評価格差を容認することが、労働そのものの犠牲の公平な測定につながるのかという点も疑わしい。ニュー・ハーモニーは、個人の責任・自発性や経済的な誘因問題とコミュニティや社会全体にわたる協同性や平等性とを両立させることの困難さが労働証券論の課題として提示された事態でもあった。

肝心なのは、このようなウォレンによる反省的契機が貨幣ヴィジョンの深化という意外な結果をもたらしているという点である。ウォレンによってオウエンの労働証券論はかなり大胆に組み替えられているのであるが、その労働証券の発行方式や制度を刷新すること

により、かえって貨幣の実存が逆照射されるのである。とはいえ、開拓者コミュニティの内部的な機構として労働証券論を理解していたウォレンには自身の貨幣ヴィジョンの实在論的前進が理解できず、真にウォレンの革新性を詳明したのはペアであった。

ペア自身の記述によっても貨幣の機能は「価値標準と流通手段」と規定されていることからペアの貨幣ヴィジョンはオウエンのそれとそれほど大きく違わないような外観を呈している。ところが、ペアによって「価値標準と流通手段」と規定されているはずの貨幣が、実際の市場ではその規定を逸脱した働きをしていることが観察されるのである。ペアは「同量の労働または労働生産物の譲渡と受取」という行為を時間的にも空間的にも異なる契機として検出し、市場取引の局地性や未完結性を強調している。労働や労働生産物の売買の契機がそのように分断されるのは、市場の交換が貨幣によって担われているためであり、貨幣が支払・決済や蓄蔵の手段として将来に持ち越されるためである。市場では取引の完了性がいつも約束されているわけではないし、労働や労働生産物を販売する場所・時間と購買する場所・時間とが異なっているはずである。それらは明白な事柄であるにもかかわらず、総需給の一致やコミュニティ内部の労働配分のみを関心事としているだけでは見えない現実の市場のすがたでもあるのだ。

貨幣の持ち越しと取引の未了性が市場の常態であるならば、代替的に提示される労働証券も現実の貨幣のあり様からの変革として開始されるべきであり、理念論的に語られる「価値標準と流通手段」という2機能に純化したものとして構想される必要はないのか。将来の支払いのために持ち越される貨幣の代替物という性格を付与された労働証券は既にウォレンによって解説されていたものであるが、ペアはこのウォレン型の労働証券論を提示されてはじめて貨幣に歪曲される市場のありのままの姿を受け入れることができるようになったのである。

特筆すべきなのは、微視的アプローチというペアの問題提起であろう。オウエンも、またウォレンもある程度は巨視的・長期的、そして社会的な観点から市場と経済を観察し、社会的な需給調整の問題や個人生活への社会的配慮のための様々な提言を行っていた。ところが、ペアによっては、そのような社会性といった観点はほとんど忘却されもっぱら微視的個人からのアプローチが用いられている。微視的な生産が社会的な需給の調整を困難にし、また短視眼的な個人が社会的配慮を欠いた利得追求行動に走ることで社会的調和を乱すというそれまでの市場観を覆すものであろう。確かに、ペアのアプローチは視野狭窄に陥りがちな個人の言動にたいして無批判的にすぎるといえることのできるものであるが、しかし、ペアが力説しているのは社会変革という一大事業は主体的なひとりひとりの個人からしか始められようがないということではなかったか。ペアは、オウエンのような博愛的事業家によって与えられるユートピアでもなく、何らかの抽象的な社会的カテゴリーに主体を求めるのでもなく、無政府的で微視的なままであっても労働証券取引という公正商業の学舎を通じて個人の自覚が育ち主体性を獲得していくことを期待したのである。その意味で、ペアのアプローチの微視性はそれまで社会主義者によって過度に強調されていた社会的協同性に反省を促す契機として重要な役割を果たしているのである。